二〇二三年度　学校推薦型選抜

経済情報学部経済情報学科　一般推薦

小論文　問題冊子（解答時間　六〇分）

注意事項

一　監督者の指示があるまでは、配布された問題用紙、解答用紙を開いてはいけない。

二　試験開始後、問題用紙および解答用紙がそろっているか確かめよ。
問題用紙（この表紙を含め　四　枚）
解答用紙（　一　枚　）
もし足りない場合は、監督者に知らせること。

三　解答用紙の受験番号記入欄に、もれなく受験番号を記入すること。

四　解答は、縦書きで記入すること。

五　解答用紙のみを提出し、配布された問題用紙は持ち帰ること。

問題

次の文章は、湯川秀樹「この地球に生れあわせて」（一九七三年）から、一部を改変のうえで引用したものである。全文を読み、あとの問いに答えなさい。

昔はとても広い平らな地面がどこまでも続いているのだろうと、のんきに構えておった。だから人間が何をしようと大したことはない。はっきり大自然という言葉で表されますように、この自然界というものは絶大な力のあるものであって、人間が何かをしても、自然界は元に戻る、つまり①があった。近ごろまで地球というのは人類にとって非常に大きな世界でありまして、少々のことを人間がやっても地球は①［　　］をもっていると思われていたわけです。たとえば地下資源ですが、物質としての資源にせよ、エネルギー資源にせよ、どちらもほとんど無尽蔵であるから、人間は一生懸命働いてどこかから資源を掘り出して使えばいい、それで人類の生活はよくなるという考え方、それでいいという時代がずっと続いてきたわけであります。

働くということは、物をつくり出すということだった。つくり出せば、それを誰かが利用する。利用する人があると予想されるから、そういう物をつくり出す。機械をつくり出せば誰かが使う、食料をつくり出せば誰かが食べる。生産と消費がいつも一対になっている。近ごろまでは②できるだけたくさんの物を生産するのがよろしい、そしてみながどんどん消費するのがよろしい、生産と消費が互いに助けあって、人間の生活がより豊かになる、生活もより快適で便利になっていく、そう考えてよろしい、と言われてきた。それは今までは相当程度当っていたわけですけれども、そういう状況が急速に変わってきたわけですね。

物をたくさんつくり、どんどん消費すると、廃棄物がふえてくる。それがふえすぎて処理に困るようになってきた。それどころか、廃棄物の中にはいろんな害毒を人間に及ぼすものが含まれていて、それがある量を超すと、危険が急に大きくなる。空気も水も食物も汚れてゆく。その結果、人間のからだの中にさまざまな毒物がたまってくる。これは物を生産する力が非常に大きくなり、またそれをどんどん消費してきたことが原因になっている。科学技術が進み文明が進んでくる、生産性が向上する、したがって消費もさかんになるということは、今まではプラスと考えてよかったけれども、マイナスの方も無視できなくなってきた。さらにこのマイナスがプラスを超してしまえば、何をやってるのか、意味がなくなる。

そもそも生産ということからして、いかにも無から有を生み出しているように見えますが、そうではないのです。鉄のような物質的資源を生産するとか、石油のようなエネルギー資源を生産するとかいっても、実は必らずどこかにあったものを採ってきているわけですね。物質でもエネルギーでも、物質不滅の原理ですとかエネルギー不滅の原理というものがある。それは物理学の教科書に書いてあるとおりです。決して無から有は出てこない。必らず地球上のどこかからもってきたもの

です。

地球の上で③われわれ三十六、七億の人間がいっしょに暮してますが、その中には現在文明国、日本とかアメリカ、ヨーロッパなど物質やエネルギーの消費量が膨大な国がたくさんあるわけですが、そのほかに、これから物質やエネルギーの消費をもっともっと大きくしようとする④国がもっとたくさんある。それらの人たち全部が豊かに暮していくためには、地球の資源はとても無尽蔵とはいえない。また今までの調子で物をつくり消費するなら、それに伴うマイナス、つまり汚染や公害はますます激しくなる。この辺で私たちみなで生きていくための方針や考え方を大きく変えなきゃならない時期がきてしまったわけです。ところが厄介なことに、人間というものは、根本のものの考え方をなかなか変えられないのですね。

ひと口に文化ということを申しますが、近ごろでは、猿にも文化があるということになっています。日本では猿の研究は大変進んでいるのでありますが、猿や類人猿を研究していらっしゃる方の話を聞きますと、大変教えられるところがあります。⑤思いのほか人間と猿はよく似ているんでして、猿にも文化があるというわけです。どういうことかと申しますと、下等な動物ですと、本能で生きているといわれます。本能とは生まれつきそういう能力をからだにそなえておりまして、決った仕方で生きていくようになっているのであります。蟻は蟻らしい生活をしておりますし、蜘蛛は蜘蛛らしい生き方をしております。蜂は見事な蜂の巣をつくります。これらは人間にはなかなか真似ができないことですが、これは本能で、蜘蛛の子供は親と同じように巣をつくるようになっている。これは文化ではないのです。そこには進歩もない。

猿はこれに反して、生まれた時は非常に未熟で、まだ何にも能力をもっておらないように思える。つまり蜘蛛などのように生まれつき決った能力はもっておらないのです。たいていのことは母親に教えてもらわないとできないのです。ひとりでにできるようになるのではないのです。母親や群の中で学びとらなければならないのです。大変な未熟児として生まれ、親の動作などを見習って、いろいろな能力を新しく身につけるわけです。その点は人間と同じで、初めからすべてが決っていないこと、そこから新しいものが生れる可能性が残されるわけです。それが文化というものですね。

文化というものは両面をもっていて、一面では誰かが新しいことを考え出す、新しいものをつくり出す。その反面で他の人たちがそれを真似する。そうした両面をもちながら文化が進んでいくわけですね。たとえば、日本のある島に住んでおりました若い猿が、お薯（いも）を海の水で洗って食べることをふとした機会にやりだしたんです。洗えば泥も落ちるし、塩あじもついておいしいので二重によろしい。ということを発見したわけですね。そうすると、他の若い猿もそれを真似する。するとだんだん今度は年上のものが真似していく。猿の社会の文化というのは、若いものから年上の方へ上ってゆくんですね。最後まで真似をしないのはボス猿だそうです。ボス猿は非常に権威をもっていますから、子猿のしたことを真似をしたらボスの権威にかかわるから、最後まで真似をしない。そういう話を前に聞いて、いろいろ感じたものです。

というのは、人間というものも実は真似をしながら成長していくわけですね。たいていのことは実は誰かのするのを見習って憶えたわけですね。しかし時々何か新しいことを誰かが考え出す。それによって進歩する。猿よりももっともっと多くの新しいことを考え出した。それで猿よりずっと高度な文化をもった人間というものになった。本能で生きておる動物とちがって、生れてから後にいろいろなものを獲得しなければならないところに、進歩の可能性も出てきたわけです。しかし、そういう可能性はあっても、実際はなかなか進歩はむつかしいのです。特に文化というのはある形のままで定着してゆく傾向を強くもっている。子は親のすることを見習う、その子がまたそれを見習う。したがって同じような生活が代々続いていく。本来はそういうことになる傾向が著しかった。人類の大昔を見ますと、長い年数の間にほとんど生活の仕方は変わらなかったわけです。

現代に生きる私たちにとって一番必要なことは、他人に迷惑をかけないと心がけることです。他人はどうなってもかまわない、自分の欲望を満足させるためだけに生きてるのは最もいけない。他人のことも同時に考える、それが人間らしい人間というものですね。特に人口がふえ地球がせまくなってしまった今日、みんながそういう人間になるほか、みんなの生きる道はない。さきほど文化ということを申しました。文化があるということは、社会も人間も変わってゆく、進歩し発展してゆくということでもあります。しかしながら、社会の様子が変わってゆくのに、思いのほか人間自身、特に人間の考え方は変わっていかないのですね。だからこそ、⑥考えなおすこと、根本から考えなおすことに、意識的に努力をしなければならないわけです。

（出典　湯川秀樹『創造への飛躍』講談社学術文庫（二〇一〇年）を一部改変して出題）

問1　空欄①には「レジリエンス」を意味する共通の言葉が入る。「力」に続く二字熟語として適当と考えられるものを答えよ。

問2　傍線部②が表す現象を、四字熟語二つを組み合わせて示しなさい。

問3　傍線部③とあるが、二〇二二年の社会を前提とした場合、ここの数字はおよそいくらに改訂するべきか。

問4　空欄④に当てはまると考えられる四字熟語を答えよ。

問5　傍線部⑤について、どこが「似ている」と言えるのかを、本文の内容にそくして一〇〇字以内で説明しなさい。

問6　傍線部⑥とあるが、著者がこのように告げてから半世紀後の社会に生きる私たちには、いま、どのように「考えなおす」努力が求められているとあなたは考えるか。本文の内容をふまえ、あなた自身が重要と考える現代的課題を取り上げながら二〇〇字以内で述べなさい。

二〇二三年度　学校推薦型選抜
経済情報学部経済情報学科　一般推薦解答用紙

受験番号（　　）

問1

力

問2

問3

億

問4

問5

問6

一般推薦小論文問題

・湯川秀樹「この地球に生れあわせて」『創造への飛躍』講談社学術文庫、二〇一〇年

（一部改変し出題）

問1

【出題意図】

・昨今、使用頻度が高まっているカタカナ語の意味を、正しく押さえているか否かを確認する。

【解答のポイント】

・正確な語義を知らなくても、文脈に照らして適当な意味を引き出してくることができれば○。

【解答例】

復元力（回復力、等でも可）

問2

【出題意図】

・社会経済に関わりの深い基本的な熟語とその用例を、正しく押さえているか否かを確認する。

【解答のポイント】

・言葉を知ってさえいれば答えを間違うことはないはずの簡明な問いである。ただし半世紀前の日本を象徴する言葉でもあることから、現今の若年世代にとっては日常会話レベルでの馴染みが少なく、言葉の意味をかえって深くまで考えさせられたかもしれない。そこが狙いでもあった。

【解答例】

大量生産大量消費

問3

【出題意図】

・世界情勢を左右する重要な構造的要因の一つとして、人口の趨勢がある。少子高齢化に伴う総人口減少が喧しく唱えられる日本の人口動向のみならず、増加率は漸減傾向とされるとはいえ絶対数の増大が止まらない世界の人口動向に対しても、広く関心を向けているかどうかを問う。

【解答のポイント】

・この入試直前の二〇二二年一一月半ば、世界人口が八〇億人を突破したと国連が発表した。時事にアンテナを張ってさえいれば非常に平易な問題だったかと思われる。

【解答例】

八〇（右記国連発表以前の一般常識に配慮し、七〇億人台もおおむね可とした）

問4

【出題意図】

・問2同様、基本的な熟語とその用例を正しく押さえているか否かを確認する。

【解答のポイント】

・単に後発国という言葉を聞く場合も多い。ひと昔前であれば発展途上国のほうが人口に膾炙していたが、最近では開発途上国のほうが通りがよいだろう。いずれにせよ、直前の「文明国」が先進国を指していると分かれば、それとの対照により、答えはおのずと導き出される。

【解答例】
開発途上（発展途上、も可）

問5
【出題意図】
・局所だけでなく広く前後の文脈にまで目配りして、簡潔な表現の裏にある著者の「ものの見方」の特徴をつかみ取ることができるかどうかを判定する。
【解答のポイント】
・本能と文化は異なるという、この文章の核心的主張が現れている部分からの出題である。過去から連綿と受け継がれてきたものを模倣するだけでなく、それを改めていくことのできる可能性を兼ね備えたものが文化であると著者は述べている。模倣にも意図しない写し間違いがあるだろうし、全くの好奇心から何かを試してみて偶然に新しいことを発見する場合もあるだろうが、いずれにせよ決まったことの繰り返し以上のことを生み出す余地を持つものが文化と定義され、あらかじめプログラムされたものとしての本能とは明らかに対比的に捉えられている点を、押さえてほしい。
【解答例】
猿は初めから決まった能力を持たない。誕生直後はほぼ無能力であり、親や周囲の動作を見習いながら能力を獲得していく中で、全く新しい能力を身につける可能性が生じている。つまり本能ではなく文化を持つという点。（一〇〇字）

問6
【出題意図】
・現今の社会で課題となっている具体的事例として適切なものを各自で探し出し、その解決に向けた提言を自らの言葉で論述できるかどうかを問う。
【解答のポイント】
・問5でも取り上げた「ものの見方」にもとづく著者の批判は、環境に対して無遠慮に負荷をかけていた半世紀前の世代のみならず、資源面での困難を知識として身につけていながらも、過去からの惰性として続いている生き方からなかなか抜け出せない私たちの世代にとってもなお有効で、いまだ古びていないこと。この点が意識できれば、あとは具体例を挙げて論じるのみである。解答が多様性に富んでいたことを、受験生諸君の鋭敏な感性が今後様々な分野で課題解決の糸口を見出していくだろう可能性を示唆するものとして、喜ばしく思う。
【解答例】
省略